

大原富枝

川

は
な
ま

流

大原富枝●川はいまも流れる

昭和48年12月20日
昭和52年2月1日

第一刷発行
第三刷発行

定価 七八〇円

著 者 大 原 富 枝

発 行 者 藤 山 真 人

発 行 所 株式 東 邦 出 版 社

東京都新宿区西早稻田三十三
電話東京(二〇二)七六三二・三
振替 東京 八五二七五

印刷・日大印刷 製本・東京美術紙工

目次

川はいまも流れる……………3

蟬と朝顔……………177

あとがき……………209

題字
著者自筆

川はいまも流れる

祖父は明けがたに死んだ。

痰がからむようにのがごろごと鳴って、それが止むとせわしく息を吐きはじめ、吸う息はなく、最後にはなまあくびのようなものを漏して、静かになった。

慧子^{きこ}は、周りの人たちと同じにじいっとそれを見つめていた。顔色も眼の色も平静であったけれど、からだの芯の方で衝撃を受けていた。——終った！ 終ってしまった、と思った。祖父のいのちがというのではない。自分のなかで、なにかが終った！ と思ったのだ。茫然と坐っていた。

ほんの一瞬のことだが、周りの人たちが消えて、祖父と二人だけのように感じて坐って

いた。しいんと静かであった。

叔母の夫の下篠鉄意が口の中adenaにか唱えるようにつぶやきながら、落ちている祖父の下顎を持ちあげて合せようとしていた。死者への敬虔な態度というよりも、壊れた甕を接着力でくっつけているひとの慎重さに見える。うまく合さった顎を、そうっと手を引いて彼は満足げに眺めた。

そんな叔父や、念仏らしいものを唱えている女たちの姿や声が、ガラス戸をへだてたように慧子には感じられた。

「英邑に知らせにヤアなるまいのう、だれぞ電報を打ちにいかそうか？」

叔父は人々を見廻していった。

「そう、そりヤア勿論、知らせてやらにヤアいかん——」

夫の寛道がそう答えるのを、そして自分の方をちらっと見るのを、慧子はやはりガラス戸越しのように眼の隅に入れていた。そっちは見ないで叔父に背いて見せた。

——あのひとは、またわたしの顔を見る！　ひとに返事をするときに……

夫のその癖が——というよりも、そういうときの夫の眼の表情が彼女は好きになれなか

った。

頭の後の方がへんに軽いような空っぽな感じがあった。ここで倒れてしまつてはみつともない、と慧子は思った。貧血はずっと前から持病のようになっていた。

「ちよつと失礼して……」

慧子はつぶやきながらふらつと立上つた。みんなが自分を見るのがわかつた。

「あたまが……」

やはりボソツと云つて、慧子は部屋をでた。寛道がついてきて、

「眩いがするのか——」

と訊いた。

もう馴れていて、返事は期待していない口調であつた。

「鍵をとつて——」

慧子は手を伸していった。寛道は廊下の途中から広い土間に下りてゆき、大人の手ほどもある大きな土蔵の鍵をとつてきて渡した。慧子が鍵をほしいというのは土蔵の二階に一人でいたいということで、寛道にとっては遮断機のようなものだった。そこから先へは彼

は立入るわけにはゆかない。——そんなふうになってしまっていた。

長い廊下の突きあたりから丸い飛石を四つ五つ渡って、慧子は土蔵の重い大戸を開いた。穀物と藁と、そして日光の通らない空気のままじりあった臭いが、彼女の頬に微かに揺れた。急な狭い階段を上ってゆくと、天井の低い二階の小窓の厚い扉を引きあけた。金網ごしに葉末が褐色にすがれはじめている葦と、矢竹の藪が見える。眼の位置をかえるにつれて、石のごろごろした白い川原と浅い水際が目にはいる。窓ぎわに置いてある木製のベツドに腰かけて、慧子はじいっとしていた。

川原はいま夜が明け放れたところであった。窓の真下には削ぎ下したような断崖がまだ枯れない草に覆われていて、その向うに碧い淵が、さらにその水が大きな石や岩に白い飛沫になって流れる浅瀬とが、うすれはじめた川霧の底にある。

階下で大戸の開く音がした。階段のきしむ音がして、寛道の頭が、それから胸まで現れた。

「——どうしたの」

いつもは決してあがってきたことのない夫が、ここまでやってきたことに慧子はおどろいて訊いた。

「いや、どうもせんけど……」

寛道はどことなくふだんとちがったものを顔にも、体ぜんたいにも漂わせていた。彼はぼっさりとして慧子の前に立っていた。

「祖父さんが死んだ思うたら……お前の傍にいたい気がした——」

思いがけないことを聞いて、慧子はまじまじと夫の顔を見た。この一年間、他人になっ
てしまつて、話すことといつたら是非必要な暮しむきのことばかり、心に触れあうような
会話を交したこともなかった。

「そう？ お祖父が死んで、なにかもう終つてしまつた気がするの、なにかわからんけ
ど……」

「うむ……」

寛道は肯いて突立っていた。

「妙な気がするのよ、あたし。——自分もいっしょに死んでもうた気がする」

「うむ——」

慧子はうつむいて、顎を衿の中へうずめるようにしながら、

「反対かしらん——いま生き返ったのかしらん……」

寛道はこんどはうむ、ともいわずに突立っていた。

「子供らアに曾祖父さんにお別れさすの、出来るだけ短かい間にしてね、——あんな年ごろに、死んだ人間を見るの、ショックでしょ」

「うん、そうする——」

寛道は、頭のなかにもやもやとしているものが、まだ一つの形になりきらない、といったふうな、漠とした顔をしていた。何かを妻にいいたくて、ふだんの習慣を破ってここまであがってきたけれど、話すべきことがはっきりした形にまとまらない、というふうに。

慧子にはそんな彼の気持がわからないわけではなかった。九十に近い年寄りではあったし、もう長く寝ついていたのだから、祖父の死ぬことは勿論誰にもわかっていた。しかし、ほんとうに死んでしまったとき、寛道の気持の複雑さが慧子にも推察できる。それは倉石暁太という、若い日に自分が愛した男と関わりがあるのだ。祖父はいつも暁太との関わりで慧子に感じられていた。寛道にもいまはそれがわかつている。

寛道は結局、諦めたように階段の方へ歩きながら、

「あっちをあけるわけにいかんけに、わしは下りる。大丈夫か——」

「大丈夫、あっち、お頼みします」

——眼の周りを黒ずませた疲れた顔で、慧子はぼんやり坐っていた。心が薄い膜のようにふるふると慄えて泣いていた。

この二階の隅には、角々に金具を打った古い漆塗りの大きな文庫があった。祖母が嫁入りのとき、学問好きだった父親から物語本など入れて持たされてきたものである。いまは慧子のものになっていて、彼女の古い手紙類がはいっている。慧子はその蓋をあけて眺めていた。ピンクや水色や黒のリボンに分けて束ねられているそれらの手紙は、みんな倉石 暁太からの手紙で、古いものは二十年あまりにもなる。

肉太の万年筆の強い手蹟が、インキの色も黒ずんでいた。大学ノートや文房堂製とセビヤで小さい文字のはいつている上質の原稿用紙を利用した手製の封筒が多く、ごく稀に白の角封筒がもうすっかり黄ばみ、褐色になったりしてまじっている。

寛道と結婚して以来、慧子はそれを見ることはしなくなっていたが、暁太の死んだ前後、正確に言えば彼の還るのを待っていたころ、また彼がもう還ってはこないのだ、と諦

らめなければならなかったところ、頻繁に毎日のように彼女はそれらを読み返した。いまでも封筒を見れば大体いつごろのものがわかるし、それぞれの封筒はその内容を暗示する表情を持つようになっていた。

——暑い日であった。バスは川に添った山裾の屈曲の多い白い街道を、ひっきりなしに警笛をならしながら、砂埃りをあげて走っていた。城下街からもう数十キロも山襲の村や町を縫いながら、乗客を降ろしたり乗せたりして走りつづけてきたので、埃にまみれたバスはくたびれたようにのろのろ走ってゆく。カーヴが多いので這うようなスピードでしか走れない。

——あ、一本松がやっと見えだした、と慧子は思った。そこからは一つだけ山裾を大きく迂回すれば、彼女の村である。しかしそこへゆきつくまでがまだなかなかだ。一本松はカーヴを廻るたびに見えたり隠れたりしていたが、ある一つの曲り角を廻ったとき、突然目の前に現れた。

そのとき、一本松の大きく傘のように拡がった枝の下から、栗毛の馬がゆっくりと歩き

だしてバスに立ちふさがるように静かに立った。馬の眼は静かでバスを恐れてはいなかった。それは暁太の愛馬の太郎であった。このあたりの男は子供のときからよく馬にのる。太郎の眼は大きくて柔和で、そのときはまたまるで運命のように冴え冴えとしていた。

彼は十分主人の意志を理解しているようにおとなしかった。町から通っているバスの若い運転手が不審そうに窓から首をのぞかせたとき、暁太が太郎から下りて、「すみません、ちょっと……」と会釈しながら、慧子ともう二人老人の乗客の残っているバスの中を覗きこむのを、彼女は見た。

「慧子ちゃん、ちょっと降りてくれ、用がある——」

暁太は、まっすぐに彼女を見ていった。なんとなく厳肅な気配を慧子は感じた。彼女は眼を丸くして暁太を見た。いままで彼と話したことも、口をきいたこともないのに、いきなりどうしたんだろう、と思った。

あんまり唐突でそして意外な出来事であるために、却って抗うわけにもゆかない重大な意味があるように思われた。——お祖父さんが突然倒れたのかしらん？ それにしても暁太さんが迎えにくるのはおかしい……

暁太の強いまなざしは慧子を見据えるように見つめていた。慧子はその眼と見つめあったまま、黙ってじりじりと腰をあげ、小型のトランクを抱えてバスを下りた。

「トランクをこっちへよこしや——」

暁太は慧子の荷物を全部持つと、一本松の下に太郎をひいていった。そこは道幅が倍ほど広くなり、石地蔵が三体据えてあった。松は大人の両腕にも抱えきれないほどの太さで、川になだれ落ちる絶壁の上に枝を伸していた。ひろがった枝は半分は碧い淵の上に覆うように張り出して茂り、水面と枝との間は数十メートルも離れていた。

「——びっくりしたか！」

暁太は慧子の驚愕おどろきを和めるようにいった。彼はぎごちなく微笑した。白い大きい前歯が見えた。慧子は彼がひどく緊張していることにはじめて気がついた。自分が怯えた、困惑した顔をしているにちがいないと思った。慧子は顎を胸につけるようにして上眼づかいに彼を見、黙って肯いた。

暁太は崖っぷちに突立って下を覗いていた。白いシャツの背中が川から吹きあげる風に丸くふくらんだ。慧子も並んで矢竹の茂った崖の下の水面を覗きこんだ。